

【中3英語力、国の目標遠く!】

—ディベート活用広がる、4技能バランスよく、楽しみながら習得

文部科学省が2日発表した中学3年生対象の初の英語力調査では、「聞く・話す・読む・書く」の全てに課題があることが明らかになった。総合的な英語力をどう高めるか。学校ではディベートを効果的に取り入れるなどの工夫が広がる。

「コンビニの24時間営業には反対。深夜営業は子供たちの徘徊（はいかい）につながり、危険だから」。広島県東広島市の県立広島中の3年生は、英語の授業で定期的にディベートに取り組む。賛成と反対に分かれての議論は全て英語だ。

臨む前に自分の考えを英語でまとめ、相手の主張も聞いて理解し、表現する力が不可欠。このため1、2年生では英語の寸劇を取り入れるなど、楽しみながら文法や会話を習得できるカリキュラム作りをしている。

英語担当の大島美紀教諭（44）は「（聞く・話すなど）4技能をバランス良く育てることを目指している」と話す。卒業時には生徒の大半が実用英語技能検定（英検）の3級以上を取得している。

横浜市立大綱中（同市港北区）も「話す」力を伸ばそうと工夫する。英語授業の冒頭、生徒が2人1組で自由に英語で会話する時間を1年の時から設け、「好きな動物は？」などと毎回10分程度やりとり。その内容も英語で発表させる。3年生はディベートに挑戦しているが、「ほとんどの生徒は英語を話すことに抵抗感がない」（同中の南川遼教諭）。

英語教育に詳しい立教大の松本茂教授は「ディベートは肯定と否定の立場に立つので中学生でも取り組みやすく、総合力を伸ばす効果がある」と指摘している。

【中3英語テストに面接10分 即興で回答、文科省が検討】

文部科学省が2019年度に中学3年生全員を対象に始める英語テストについて、10分程度の一対一の面接テストで質問に即興で答えさせる案を検討していることが2日わかった。個々の「話す」力を調べるため、面接と採点は教員が担当する。学校の負担を考慮して英語テストは3年に一度とする方針だ。

中学3年生は現在、毎年4月に全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）を受け、国語と数学は毎年、理科は3年に一度行われている。

文科省の骨子案によると、英語テストは筆記と面接の2段階とする。「聞く・読む・書く」力を測る筆記テストは、国語や数学と同じ4月を軸に検討し、面接は別日程で実施する方針だ。

生徒が通う中学校の教員が面接官を務める。面接官が示す情報や問いかけに対し、即興で自分の考えを30単語程度で表現する案などを検討している。テストは複数日にわたるため、問題も複数のパターンを用意する。

文科省は昨年、中学・高校向けの「生徒の英語力向上推進プラン」を発表。グローバル人材の育成に向け、中3全員を対象に「聞く・話す・読む・書く」の4技能を測る共通テストを19年度に始める方針を発表した。昨年6月に専門家会議を立ち上げ、具体的な出題形式などを検討している。

文科省は2日午後の全国学力テストの在り方を議論する専門家会議で、こうした英語テストの骨子案を示す。

英語力 中3「英検3級」7割届かず 4技能6万人調査 文科省・15年度

毎日新聞 2016年2月3日 東京朝刊

文部科学省は2日、全国の国公立の中学3年生と高校3年生を対象にした、英語の「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能に関する2015年度の調査結果を公表した。初めて調査した中3は、「書く」以外で国が卒業時の目標に掲げる「英検3級程度」に届かない層が約7～8割を占めた。「書く」は英検3級程度が約4割と比較的高い一方、0点が1割強とばらつきが見られた。14年度に続き2回目の調査の高校生は4技能とも依然低水準だった。【三木陽介】

調査は中学3年約6万人、高校3年約9万人を抽出して実施。授業内容や学習意欲を尋ねる質問紙調査も実施した。

現在の中学3年は、小学5年以上で「外国語活動」が必修となった現行制度の1期生になる。身近な話題の質疑応答ができる「英検3級程度」に届かないレベル（A1下位）の割合は、「読む」が73.9%▽「聞く」79.8%▽「話す」67.4%と高かった。「書く」はこのレベルが56.7%、「英検3級程度」（A1上位）が43.1%と他の技能とは違う傾向が見られたが、「0点」も12.6%に上り、ばらつきが目立った。

高校3年では、国が高校卒業時の目標とする「英検準2級程度」（A2）の割合が、「読む」は29.9%（前年度比6.4ポイント増）▽「聞く」24.2%（同3.9ポイント増）▽「書く」17.2%（同6.5ポイント増）と、前年度より改善したが依然低水準。「話す」は9.8%で前年度（9.5%）と横ばいだった。

質問紙調査では、中高生とも「話す」の得点が高い生徒は、低い生徒と比べて「授業で英語による話し合いを取り入れている」と答えた割合が高く、授業内容と得点の相関関係がみられた。

高校生の英語力がやや改善した理由について、文科省の担当者は「4技能を意識した授業の改善が進んだ結果ではないか」と指摘。中学生に関しては「どこにつまづきがあるのか詳細に分析したい」としている。

中学3年（公立）の英語力調査の得点分布

	「読む」	「聞く」	「書く」	「話す」
A2	3.0%	2.1%	0.1%	-
A1上位	23.1%	18.1%	43.1%	32.6%
A1下位	73.9%	79.8%	56.7%	67.4%

※A2…英検準2級程度。身近な日常の事柄について情報交換できる

A1上位…英検3級程度。趣味や部活動に関し簡単な質疑応答ができる

A1下位…時間や場所に関し質問したり、答えたりできる

※「話す」はA2の問題は実施していない

■ことば 英語力の目標

2013年6月に閣議決定された「教育振興基本計画」は、17年度までに5割の生徒が高校卒業時に「英検準2～2級程度以上」、中学卒業時に「英検3級程度以上」の英語力を身につけることを目標に掲げた。英語教員については「英検準1級程度以上」が中学で50%、高校で75%としたが14年度調査では中学28.8%、高校55.4%と達成が厳しい状況にある。

【ベネッセ、釧路市に電子端末2100台寄付 教材に】

ベネッセコーポレーションは18日、釧路市に小学生向け学習教材として電子端末「ポケットチャレンジ」2100台を寄付した。同市が3年前、釧路市基礎学力保障条例を全国で初めて施行するなど学力底上げに市を挙げて取り組んでいることに注目。楽しく学ぶ手段として活用してもらおう。

小学4～6年生向けで英語を含む5科目。非売品だが1台5000円程度で総額約1200万円相当。同社が自治体に1000台規模の寄付をするのは全国初。市内に21ある児童館などに置き、自由に使うもらう。

同社の成島由美小中学校事業部部長は「小学校の学習支援に取り組もうと全国のマーケティングをしたところ、釧路市が条例施行など具体的先進的だと分かった。端末を活用した成果などをフォローしたい」と話す。 日本経済新聞

手書き、細かい違いはOK 文化審が常用漢字の指針案

「とめ」「はね」に細かい違いがあっても、間違いではない——。文化審議会漢字小委員会は常用漢字では、様々な字形が認められることを解説した指針案を大筋で了承した。現在の常用漢字表でも細かい形の違いを認めているが、パソコンの普及などで多様な印刷文字が使われる中、手書きの正誤の判断が分かれるようになったため。29日開催の親部会の国語分科会で報告する予定。

指針案では漢字を点画の長短や方向のほか、「つけるか、はなすか」「はらうか、とめるか」などに分けて紹介。例えば「保」のつくりの「口」の下は「木」でも「ホ」でも誤りではないことや、「言」の1画目の点か2画目の線に接触してもしなくても同じ漢字だとしている。

常用漢字全2136字について1字当たり2、3種類の手書き例も作成。表外漢字にも考え方を適用できるとした。

常用漢字表では活字の一種を示し、「習慣を改めようとするものではない」と言及。文字の骨組みに当たる字体が同じでも、デザインや表現の差があるとしている。

しかしパソコンの普及などで印刷文字の活用が一般化。学校のテストで印刷文字以外の字形を間違いとされたなどの声が寄せられるようになり、2014年から指針を議論していた。

塾では、ずっと漢字を正しく、丁寧に書くように厳しく指導してきた。例えば「てへん」ははねるとか、「口」という字は3画で書くとか、はね、止めや長さにも注意してきた。実際、テストでも×にしてきた。それがほとんど、どうでも良いような事になってしまうのは問題だ。世界のグローバル化での英語の重要性以上に、グローバル化だからこそ、自国の言葉や文化が大事なはずだ。近年、日本の文化に関心を持つ外国人が増えている。日本語のことばや漢字をこんな風がいい加減に扱っていいのだろうか！

